

ので欲しやうとしない。さりとて寺院の伽藍に對して縮少する事にも喜ばない。「おらが村さのお寺」と云ふ因襲的觀念は活動なき淋れたまゝ乍らもあるを喜ぶが村人の心……此處に像法的遺物たる伽藍は向上も時には退歩を見乍らも現狀維持の露命、住職は肅々として法燈相續伽藍相續に寺門丹誠だ、養蠶もする、田植もする、養豚養

鶏と聖僧行基たらんとする？ されどこの中に豪農あり貧農ありする、農村寺院にありながら農に同じて行基の行をなし得ず法燈淡きに悲しむものあり。秋風サツ／＼と立初むる法窓の紙破ぶれて、火の消えざるをおそれてゐる。時正に日戰交戦の非常時局皇軍の武運長久を念じつゝ。

日蓮聖人
御遠祖 藤原共資公

鈴木智久

序

日蓮大聖人の御先祖に對しては古來色々の説がありまして一定しません。日蓮大聖人は佛様の御使だから御先祖や御系圖等はどうでも良いと言ふ人があります、然し如何に大聖人が三千年の昔本佛お釋迦様の前で法華經の

御附囑を受け末法の今日本化上行菩薩の再誕として法華經を弘むの行者でありまして、御兩親がなくては此の世の中に御生れになる事は出来なかつたでせうし、又御兩親も其の御先祖がなくてはあり得ないのであります。古來偉人とか賢人とか、又は聖人とか言はれる人は大底小さい時から家庭教育、御兩親の教化によつて後年偉大

な事業をなしてゐるのであります。今我が日蓮大聖人の御両親が今迄多くの人によつて考へられてゐた様に只安房國小湊浦の漁夫の小供であつたなら、どうして後年あれ程迄の御方となる事が出来ませう。こう考へますと姓氏血統は其の人となりと重大な關係を有するのであります。日蓮聖人の御先祖は立派な御方であり、御両親は山緒正しき御方であつた事は其の人となりを見る時誰しも考へられる所であります。では一体日蓮大聖人の御先祖はどういふ御方であり、御両親は如何なる御方であつたのでありませう。

其の源を遠く尋ねますれば、人皇第三十八代天智天皇を扶け奉り、蘇我氏を滅し大化の改新をなし國家を泰山の安きに置き奉りましたる大職冠藤原鎌足公であります此の鎌足公から九代目に共良公といふ方があり、聖武天皇の御代外國から我國を攻めた事がありました、天皇は非常に御心配遊ばされ討手の大將として此の藤原共良公を差向けられました。共良公は大軍を以つて直ちに外敵

を退治致しました。天皇は非常に御喜びになり、其の賞として遠江國を初め多くの國々を賜り、特に遠江國は子孫代々迄との約束でありました。此の共良公から四代目即ち鎌足公から十二代目に共資公と言ふ御方があり、父祖の功勞によつて人皇第六十六代一條天皇の正暦元年六月、只今（昭和十二年）から九百四十七年前御年三十才にして初めて遠江の國司として赴任し、只今の濱名郡村櫛の郷に御城を築き志津城と名付けて住せられました。

此の共資公から十一代目に日蓮大聖人が御誕生遊ばされたのであります。此の備中守共資公が遠州の國司として村櫛に下向せられたから其の子孫に日蓮大聖人の様な偉人が出、又維新の前彼の安政の大獄を出現せしめて最後水戸浪士の爲に櫻田門外の露と散つた幕府の忠臣大老井伊掃部頭直弼即ち只今の井伊家を出したのであります。若し共資公が遠州の國司として村櫛に赴任せられなかつたなら日蓮大聖人も御誕生遊ばされなかつたし、又現在五百萬の信者を有する日蓮宗もあり得なかつたので

ありませう。共資公には男子がなく女子ばかりで自分の後繼に随分苦心せられました。神佛に祈願をして良き男子を得られん事を願ふてゐました。下向後二十一年目に引佐郡井伊谷の八幡宮に参拜して石段を下らんとした時石段の下の井戸の傍で赤兒を拾ひ、此子が成人の後自分の女を嫁せて後目として備中太守共保と名附け井伊の姓を興へ、又井桁に橋の紋所を興へました。此の共保公が井伊伯爵家の元祖になり、共資公が共保公に興へた井桁に橋の紋所が現在日蓮宗を代表する紋所となつて今日残つてゐるのであります。こゝにいふ譯で共資公を日蓮大聖人の御遠祖と申し上げてゐます。

然るに共資公滅後九百年に及ぶのに一体日蓮大聖人の御遠祖共資公とは如何なる御方であり、日蓮大聖人の御紋所である井桁に橋は何處から出てゐるか一切不明でありました。是は御遠祖共資公が九百年已來世の人から忘れられ久しく世に現れなかつた爲であります。不肖幼少より共資公は何處の地で御逝去遊ばされたか、又如何に

祭祀せられてゐるか随分處々方々を尋ね苦心の末、大正八年に至り遂に遠州濱名郡村櫛村の御山塚にある古墳こそ夢にも忘れられぬ共資公の永へに眠り玉へる御墳墓地である事を確證を得ました。遇々外護者たる濱松市利町藤田淺藏氏夫妻の淨財寄進により、此地の買収を行ひ爾後數回に亘り地域の擴張に力め、遂に昭和七年十二月十一日多年の宿望であつた復興祭を營み報恩供養塔建立するに至りました。茲に於て九百年以來地下にあつて何等供養を受けられなかつた共資公は、日蓮大聖人の御遠祖として世に現れたのであります。

日蓮大聖人の御系圖

藤原鎌足公から九代目三國藤原共良公の時外寇を征伐して遠江國を始め諸國を賜りました。十代目を良春公、十一代目を良宗公と申され此の三代の間は京都に御住ひになり、十二代共資公の時正暦元年六月領地である遠江國に初めて下向して村櫛に住せられました。共資公の養

子共保公は引佐郡井伊谷に新城を築き井伊と名乗つた事は前述の通りであります。共保公の世繼を共家公、三代目を共直公、四代目を惟直公と言ひ代々村柳と井伊谷の

兩城に住して國政を司つてゐました。五代目の盛直公から一向井伊谷に住ふ様になりました。此の盛直公に三人の小供があり長男は早世して次男良直公は井伊の六代を繼ぎ、三男三郎俊直公は同郷横尾に分れて赤佐家を興してゐます。是が後の奥山家の先祖であります。四男を四郎政直公と言つて、又井伊家から分家して皇紀一八一〇

年久安六年頃遠州の貫名郷に下つて貫名氏となつたのであります。此の政直公が日蓮大聖人の直接の御先祖に當る方でありませぬ。政直公に二人の子供があり、長男を四郎行直公と申され貫名二代を繼ぎ、次男の六郎直友公は石野に分家して石野氏となつたのであります。三代目を重實公、四代目を貫名次郎重忠公と申され、此の重忠公が日蓮大聖人の御父上であります。重忠公御年三十二才建仁三年五月七日皇紀一八六三年幕府の怒に觸れて安房

國小湊浦に流罪になつたのであります。故に貫名氏が遠州貫名郷には政直公、行直公、重實公、重忠公の四代五十三年間住れたのであります。

重忠公に五人の子供があり、日蓮聖人は第四番目の御方であります。御兄弟の中一番末の弟の藤平重友と言ふ御方のあつた事は明でありますが、其の外の事は明ではありません。現在重友の子孫は下總大野郷に藤平を姓として、曾て縣會議長をした程の名門として今猶榮へてゐます。

日蓮聖人は重忠公流罪になつてから二十年目、共資公下向から二百三十二年後で、只今から七百十五年前で重忠公五十一才の時であります。

御母上は清原氏で下總八幡郷の大野吉清の女で、重忠公が安房に遷されてから嫁せられたので大聖人は小湊浦で御誕生遊ばされ、重忠公は小湊に遷されてから濱の小供を相手に手習を教へ、暇があれば濱に出て漁夫の生活をしてゐましたから人々は日蓮大聖人は漁夫の小供であ

つたと考へられたのであります。然し本當は只今申しました様に由緒正しき御方の後裔であります。

井桁に橋の紋所の興起

御縁祖共資公は共良公の功勞によつて備中守に任ぜられ、遠江の國司として村櫛に赴任せられ、村の東南で濱名湖に突出した淺間山一帯に御城を築き志津城と名附けました。志津城は南北の兩殿に分れ幕末迄其の面影を残してゐましたが今は大凡養漁池に變つてゐます。共資公は志津城に住し領内を檢分せられ、租調の令をしき、民を愛撫して良き政を行ひましたから人民から神の如くに慕はれてゐました。此の共資公は下向してから二十年御年五十才になるに及んでも男子が御生れにならなかつた此の上は神佛に御願するより外はないと、引佐郡井伊谷にある八幡宮に祈願せられ絶へず参拜せられました。明れば共資公五十一才の寛弘七年正月元旦いつもの通り家來數人を引連れ八幡宮に参拜を濟せ神主と共に石段を下

らんとした時、何處からか赤子の泣き聲が聞へるので不思議に思つて見ると玉垣の傍井戸の中に衣に包まれたいとも可愛らしき赤兒が捨てられてありました。共資公はこそ神の我に與へ玉ふたものに相違ないと大いに喜び、神主に命じて養育をさせ神主は自身では養育が出来なかつたので社内に住んでゐた野澤某を乳親として七才迄養育をさせました。當時の神主は西尾權守といひ其の子孫を西尾常吉と言つて現に井伊家の系圖を所持してゐます其子の七才になるに及んで城内に連れ文武の道を教へました。一を聞いて十を知る聰明さ、共資公は掌中の玉として愛し十五才になるに及び元服して備中太守共保と名乗り、井伊の姓を與へ、出生の井戸の傍に橋木があつた所から井桁に橋の紋所を與へました。共保公二十才に及び井伊谷に新城を築き自分の女を嫁せて一切の國政を共保公に譲り、自分は思ひ出深き志津城に歸り余生を送りました。是から村櫛を志津古城、井伊谷を新城と呼ぶ様になりました。

現在井伊谷に龍潭寺といふ寺があります。千百年程前行基菩薩の開山で當時は八幡山地藏寺と稱し、八幡宮と地藏寺とが合祀せられてありました。共資公當時は三論宗で後に天台宗に變り現在は臨濟宗であります。此の龍潭寺の門前を去る約一町の田の中に共保公出生の井が今猶昔ながらに存してゐます。

共資公の御逝去

共資公は養子の共保公に一切を譲り思ひ出深き村櫛に歸り志津古城で風月を友として余生を送り御年七十五才の七月一日眠るが如く大往生を遂げました。御遺骸は御遺言により御城の裏山の小高き丘に葬られました。是から此の裏山を御山塚と尊崇する様になりました。

共保公は共資公の後を受けて良き政を行ひ、益威勢を四方に振ひ遠江に十三郡、駿河、三河に幾つかの領地を得ました。かくて寛治七年三月二十日御年八十四才で井伊谷で逝去せられました。

御遺骸は當時の地藏寺に葬られ、御法號は自淨院殿前備中太守行輝寂明大居士と申し上げ、以來地藏寺が代々井伊家の菩提寺となつて今日に至つたのであります。共保公以來代々井伊家の御墳墓は龍潭寺に祭祀せられてゐます。又龍潭寺の井伊家の御魂屋には共資公以來の御靈牌が安置されてあります。共資公の御法號は信元院殿前備中守本源道性大居士と申し上げます。此の御法號は九百年昔ながらの御法號で是を見ても當時遠州の國司であつた事が知れます。共保公以來の御方は龍潭寺に葬られ井伊家及び同寺で厚き供養を營んでゐましたが、養父の共資公は一人村櫛に葬られた關係上年と共に忘れられ九百年の今日迄何等供養を受けられなかつたのであります。大正八年村櫛に御墳墓地を發見するに及び初めて法華經御供養を受けらるゝ至りました。御命日には御墓前で盛大なる供養祭が毎年營れてゐます。

共資公と法華經

井伊家代々の當主が逝去せられた時は龍潭寺の寺主が法華經一部を提へて墓前で讀誦し、彦根へ國代へになつてから後もわざわざ彦根に向き法華經を讀誦してゐました。井伊家と法華經とは共資公以來何等かの因縁關係に置かれてありました。徳川末期一身を犠牲にした井伊大老も熱烈なる法華經の信者でありました。共資公は久しく地下にあつて法華經の御供養を受けられん事を願ふてゐました。古來御山塚に手を觸れた者は必ず病み村人は恐れて此地を千古の不思議として來つたのであります。大正八年初めて此の聖地を發見してから後何等の異もなく、法華經の御供養を受けた事をどんなにお喜びなされた事でありませう。

共資公の御墳墓地

御縁祖共資公の御墳墓地御山塚は村櫛村の東南端の小

高き丘の上にあつて、前方は濱名湖の勝景を眼下に見下し、遠く遠州灘から大平洋を望み、後には千古の白雪を頂く富士が巍然として聳へ、如何にも大聖日蓮聖人の御遠祖が永へに眠り玉へるにふさはしい勝地であります。地内には梅櫻が植り自然の公園の如く、春には櫻、秋には紅葉、夏は涼しく冬は暖く、一度此地に來る者其の聖地の有難さに自然頭の下るのを禁ずる事が出来ません。

天氣の日此の御山塚に立つて濱名湖から大平洋を望めば、如何にも宇宙の廣大無邊なのに驚かされます。共資公は普段に此の金波銀波の亂れ飛ぶ大平洋を望み、太平洋の際涯ないと同様に此の法華經が末法萬年盡未來際を盡して一天四海に廣宣流布すべき事を豫言してゐるかの様に感ぜられます。

曾て昭和九年身延山法主現日蓮宗管長望月日謙猊下が静岡縣下御親教の際は態々村櫛の御縁祖に御參拜せられました。此の時全村擧つて老ひも若きも小學生、青年團等有ゆる人達一村擧つて猊下を出迎へ、手に手に太鼓を

打鳴し異教の空に時ならぬ題目の華が咲きました。貌下にも非常に感激せられました。

由來同村は全村神徒で昭和の半まで題目の聲さへしなかつた此の海邊に今や除々に題目の華が開かんとしてゐます。是は九百五十年の昔共資公が初めて此地にトし後日蓮大聖人を出した爲であります。今や此の聖地を有する村民が擧つて此の由緒ある聖跡を永く保存すべく計畫をしてゐます。誠に喜ばしき次第であります。二十年前此地を壞して養魚池にせんとした村民が此に着眼し、永

諫

曉

く後世に傳へ廣く世に紹介せんとしてゐます。時機至らば此地に一寺を建立し、宗祖日蓮大菩薩への御報恩一端に供せんとするものであります。

参拜順路

△東海道線辨天島驛下車、村櫛行巡航船により約三十分
村櫛港に着、上陸約十町

△濱松驛前村櫛行乗合自動車、館山寺を経て約一時間
村櫛終点より約八丁

田邊正知

弘安三年十月八日、日蓮聖人寶齡五十九歳、身延山より鎌倉の四條金吾殿に御遺はしになつた『御消息』に次

の如く仰せられた。

弘長には伊豆國、文永には佐渡の國、諫曉再三に及べ